

## はじめに

福家崇洋\*

本特集は、京都人文学園を中心とした戦後京都と教育・文化運動に関する論稿と資料目録、翻刻資料から構成されている。

最初に、本特集が刊行されるまでの経緯を記しておきたい。きっかけは、福家が京都大学職員組合の紹介で2020年初めから京都地方労働組合総評議会（京都総評）の資料調査をさせていただいたことである。京都総評の事務所は西院駅近くのラポール京都5Fにあり、その向かいの会議室に図書、資料、写真などが置かれていた。資料調査のご許可を得て、定期的に会議室に通わせていただき、コロナ禍で当初の予定よりだいぶ時間を要したものの、2023年に資料目録の作成を終えることができた。この調査の途中で、京都総評職員の方が新資料を発見したとして、小段ボールに入った資料を持ってきてくださった。これは1960年代から80年代にかけて京都総評の大会で配布された書類であった。今回の特集では、年代も古く、特に貴重と思われるこの資料群の目録を「京都地方労働組合総評議会（京都総評）関係資料目録」（資料篇資料目録Ⅳ）として掲載させていただくことにした。

京都総評に通っていたときに、ラポール京都3Fに京都勤労者学園の事務室や教室があることがわかった。京都人文学園の後継となる同学園については、先行研究などで知っていた。ある時、京都人文学園時代の資料がないかを京都勤労者学園職員の方に尋ねたところ、あるとのことで、倉庫に収まっていた京都人文学園の関連資料を見せていただいた。これをきっかけに、京都総評に通いながら、京都勤労者学園にも定期的にお邪魔して、資料の整理と目録化をさせていただくことになった。

この作業のかたわらで、駒込武氏（京都大学教育学研究科教授）の紹介で知り合ったのが須永哲思氏であった。須永氏はすでに『桑原正雄の郷土教育「資本の環」の中の私達』（京都大学学術出版会、2020年）を上梓されており、本書執筆の過程で吉田九洲穂氏のご家族に会われ、

---

\* ふけ たかひろ 京都大学人文科学研究所

吉田氏旧蔵の資料が使われていた。実は吉田氏は京都人文学園出身で、のちに同学園の年史をまとめるうえで重要な役割を果たしていた。それゆえに、吉田氏旧蔵資料には京都人文学園に関わるものも多く含まれていた。それらの資料を須永氏が整理・目録化したものが「吉田九洲穂旧蔵京都人文学園関係資料目録」(資料篇 資料目録Ⅱ)である。そのうちの新村猛の講義ノートのコピーを須永氏が翻刻したものが「一般教養(新村猛先生)(6.10 ノ趣意書二依ル)」(資料篇 翻刻資料Ⅱ)で、草創期の京都人文学園で新村猛がどのような授業を行っていたかを知ることができる。

須永氏も京都人文学園の資料に関心があるとのことで、2021年7月から一緒にラポール学園で資料調査にあたることになった。当初は山本捷馬氏(現在、琥珀書房を経営)も作業に加わってくれていた。3人で京都人文学園関係者である川野邦造氏、杉本喜代巳氏へのインタビューも行い、資料も拝見させていただき、川野氏の資料調査の一部が須永氏の論稿に成果として生かされている。京都人文学園の特徴のひとつにエスペラント教育に熱心だったことがあるが、川野氏所蔵の写真はその様子をよく伝えるものになっている。

その後、2022年の教育史フォーラム・京都に須永氏が参加したときに、オンラインで報告を担当されていたのが奥村旅人氏だった。この時のテーマは「『労働学校』における戦前・戦後の連続性と変容——1920年代から1950年代までの住谷悦治の活動を手がかりとして——」で、まさに京都人文学園設立時の住谷悦治に着目したものであった。研究会終了後に須永氏から奥村氏に連絡して、京都人文学園の調査について話し、奥村氏も関心があるとのことで、2022年4月から一緒に調査を行うようになった。

こうして須永氏、奥村氏のご協力を得て完成したのが「京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録」(資料篇 資料目録Ⅰ)である。また、ラポール学園に所蔵され、京都人文学園の歴史を考えるうえで重要な資料「12月1日 講師会議記録」(簿冊「京都勤労者学園の創立人文学園、勤労協資料(渡部徹氏保存分)」内)(資料篇 翻刻資料Ⅳ)が奥村氏によって、「昭和二十一年度 審査合格者作文 京都人文学園」(資料篇 翻刻資料Ⅲ)が須永氏によって翻刻されて、今回の特集に収録させていただくことになった。京都人文学園に応募した人びとが当時何を考え、学園に何を求めていたのかが後者の資料から明らかになる。前者の資料からは、京都人文学園の歴史上重要な、京都勤労者学園に改組されるときの白熱した議論が綴られている。いずれも学生や教職員の人文学園にかける想いが伝わる資料である。この間、何度も資料整理のために作業場として教室をご提供していただいた京都勤労者学園及び職員の皆様に感謝申し上げます。

以上の整理事業と並行して、機関の資料だけではなく、そこに関わった人々の資料も見ておく必要を感じるようになった。むろん、関係者の数は膨大になるが、まずは京都人文学園の初代学園長をつとめた新村猛について、父新村出の資料を公開している鞍馬口の重山文庫

はじめに (福家)

にお尋ねしたところ、その息子である新村恭氏から未整理資料が存在することを教えていただいた。このため、福家、須永氏、奥村氏、山本氏で新村猛関係資料の整理を始めることになった。新村はフランス文学者で、資料にフランス語文献が含まれるため、新たに藤野志織氏に加わってもらいながら資料整理を行った。その成果が「新村猛関係資料目録」(資料篇 資料目録Ⅲ)である。なお、本資料群には、京都人文学園の背景を考えるうえで貴重な資料も収録した。ひとつは藤野志織氏が翻刻を担当した、新村猛の講演筆記「民主戦線の諸問題」(資料篇 翻刻資料Ⅰ)であり、もうひとつは福家が翻刻した、人文学園主事だった佐々木時雄氏への新村猛への弔辞(資料篇 翻刻資料Ⅴ)である。前者では、新村が人文学園を立ち上げるにいたった思想的、社会的な背景が明らかになる。後者では、学園を主事として支えた佐々木と新村の交流が偲ばれていて興味深い。以上の目録と翻刻資料の掲載に快く応じてくださった資料所蔵者の新村恭氏と整理の場所を提供していただいた重山文庫に感謝申し上げたい。

それぞれの資料の目録を作成しつつ、それを翻刻し、さらには各自の専門とするテーマに基づいて執筆したのが論文篇の各論文である。前半は京都人文学園に、後半は学園に重要な影響を与えた人物を取り上げた。

奥村氏の論文は、京都人文学園の講義の担い手や教育内容に着目しながら学園の創立から京都勤労者教育協会との合併に至るまでの史的展開を記述したものである。講義を担当した知識人が参画していた社会運動の性質の変化が、学園の教育内容にいかなる影響を及ぼしたのかが浮かび上がる内容となっている。

須永氏の論文は、京都勤労者学園に所蔵されている一次資料のほか、新たに発掘した個人所蔵資料群などの一次資料にそくしながら、京都人文学園の日常生活やエスペラント運動との関わり、私立各種学校として発足した意味の問い直しについて考察したものである。

藤野氏の論文は、新村猛が中心な役割を演じた1930年代の反戦・反ファシズム運動の一環である雑誌『世界文化』に注目したものである。本稿は、新村とフランスの結びつきや、『世界文化』の意義を京都帝国大学文学部仏文科や関西日仏学館の活動と比較しながら、1930年代の京都に固有の学術的・文化的文脈のなかで再考する内容となっている。

福家の論文で取り上げた渡部徹は、京都大学人文科学研究所教官で京都人文学園から京都勤労者学園への移行にあたって重要な役割を果たした人物である。本論では、それに先立つ渡部の軌跡と学問を、同時代の社会背景や学問と関連付けながら論じたものである。彼の実証的学問に対する矜持と、人文学園を介した交流・教育を重視した姿が明らかになるだろう。

以上の論文と目録、資料が京都人文学園の研究史を大きく前進させるものだけでなく、戦後京都の教育・文化運動が再検証されるきっかけになれば幸いである。

最後に、本特集刊行までに資料調査にご協力いただき、快く資料の公開に応じてくださった

人 文 学 報

京都総評の皆様，京都勤労者学園の皆様，新村恭氏，川野邦造氏，吉田匠氏，またインタビューに快く応じてくださった杉本喜代巳氏，大橋史子氏，調査にあたり関係者のご仲介に尽力いただいた京都大学職員組合の皆様，河原田真弓氏に心より御礼を申し上げたい。